

中学生の子を持つ保護者の特性シャイネスと  
教師・スクールカウンセラー・外部の専門機関に  
援助を求めることへの心配の関連

渡辺 伸子

東北公益文科大学総合研究論集第43号 抜刷

2022年8月30日発行

## 研究論文

# 中学生の子を持つ保護者の特性シャイネスと 教師・スクールカウンセラー・外部の専門機関に 援助を求めることへの心配の関連

渡辺 伸子

## Association between trait shyness and worry about seeking help from educational and psychological experts among parents with children in junior high school

Nobuko WATANABE

### Summary

This study examines which counseling types and clients are inhibited by trait shyness. Parents of children in junior high school answered questions on scales measuring trait shyness and worry about seeking help from educational and psychological experts scale via a web-based survey. The study analyzed data from 323 respondents. The results revealed that, first, parents with higher trait shyness were more likely to be anxious about whether an outside counseling agency would help their children. Second, parents with higher trait shyness were more likely to be anxious about whether a school counselor or outside counseling agency would be helpful. Third, the association between parents' trait shyness and worries about consulting teachers differed depending on their child's gender. Only some of the results replicated those of Yamazaki and Iida's (2016) follow-up study. The study discusses what information about a specialist should be given to parents before a consultation.

**key words:** trait shyness, worry about seeking help, parent, junior high school, student

## 問題と目的

子を持つ保護者にとって、子に関する悩みを専門家に相談することは問題を解決する重要な機会となる。なぜなら、専門家に相談し助言を得ることによって、保護者がより適切に子に関わることができるようになると考えられるためである。また、専門家に相談することで、専門家から子へ直接的な支援を得ることが期待できる。しかしながら、保護者が相談に至る心理的な過程が十分に理解されているとは言い難く、さらに理解を深め、相談しやすい環境の調整などにつなげていくことが課題であるといえる。

保護者が子に関する悩みの相談を持ち掛けることのできる相手には、様々な種類が想定できる。たとえば、配偶者や自らの親、知り合いの保護者など、私的で身近な相手に相談することが可能である。しかしながら、教育に携わる専門家は、経験だけでは得られない知識を有している点で、相談相手として優れている面がある。中でも、山崎・飯田（2017）は、学校の先生・スクールカウンセラー（以下、SCと呼ぶ）・外部の専門機関の3つの立場を想定し、調査を行っている。これらの立場の人々は、専門的な知見から、保護者に助言や支援を行うことが期待されているが、相談のしやすさには違いがあるものと考えられる。中学1年生の子を持つ保護者が、学校の先生に相談せずにSCに直接相談した事例も報告されており（北島，2012）、これら3種類の相談先は異なる特徴を有する専門家であると保護者から認識されていることがうかがえる。

しかしながら、全ての保護者が子に関する悩みを抵抗なく専門家に相談できるわけではない。山崎・飯田（2017）は、中学生の保護者に対し、援助ニーズと相談意図・相談経験の関連を尋ね、モデル化を試みている。その結果、学校の先生とSCに対しては、心理・社会面での援助ニーズが高いほど、相談すること自体への心配が高まることが確認された。一方で、学校の先生については心理・社会面での援助ニーズが高いほど、実際の相談経験が高まることも示された。つまり、学校の先生については援助ニーズとともに相談すること自体への心配が高まるが、実際の相談可能性も高まることが示されたといえる。しかし、SCでは援助ニーズと相談経験の関連は見られず、相談すること自体への心配が高まるのみであった。これらは子に関する悩みの種類と相談行動についての関連を検討したものであるが、保護者の相談行動を抑制する状況的要因を

示したものと考えることができる。

保護者が学校の先生やSCなどに対して子について相談することは、援助要請の一種ととらえることが可能である。援助要請や相談行動の抑制要因はこれまで、状況や状況認知のようなその場の状況に応じた要因と、特性のような状況を越えた要因の2つの視点から研究が行われてきた。本研究では、相談行動の抑制要因として、相談者の特性に着目する。特性に着目することで、どのような相手にも相談することに抵抗感を覚えやすい保護者についての知見が得られることが見込まれる。

援助要請を抑制する特性として、否定的な感情を経験しやすいこと（水子・寺寄・金光，2002）や、他者へ不信感を持つこと（増田・吉岡・石田，2016）などが挙げられているが、本研究ではこれらの特徴を総合したものとして、特性シャイネスを取り上げる。特性シャイネスとは、「特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群」と定義されている（相川，1991）。シャイネスが高いと、他者からの評価を気にし、社会的場面で不安を感じやすいことが明らかになっており（桜井・桜井，1991）、シャイネスは対人関係の構築を阻害する特性であるといえる。シャイネスは軽度の対人不安に位置づけられ、新奇な場面やフォーマルな場面で高まると考えられている（丹野・坂本，2001）。本研究で扱う学校という場面は、フォーマルであり、かつ、子を取り巻く状況は変化が多く、新奇性に富む。学校ではクラス替えや担任の交代などが年度ごとにあり、特性シャイネスの高い保護者にとってはよりシャイネスが高まりやすい場面であると考えられる。

教育場面では、すでに教師の特性シャイネスに着目した研究が行われている。シャイな教師は上司・同僚・生徒・保護者と一緒のときにシャイネスが喚起されやすいことが明らかになっている（高柳・田上・藤生，2005）。また、シャイな教師は職務を円滑に遂行していないと他者から評定されやすい（高柳・藤生，2014）。このように、シャイネスが高い場合、役割の遂行が難しくなる場面がある。そのため、シャイであることは対人的な職務が主である教員にとって、職務遂行の阻害要因になりやすい。

翻って、同じ教育場面での役割遂行に着目した場合、保護者の相談行動の遂

行についても、同様の観点から明らかにすることが可能と考えられる。保護者は子に対し大きな影響力を持つ大人であり、子に対して情緒的・道具的両面からサポートを行いやすい立場にある（石隈，1999）。そのため、保護者が子の問題について適切な相手を見つけ、相談することによって、問題の深刻化を防ぐことが期待される。しかしながら、保護者にも個人差がある。すなわち、相談行動を遂行しやすい保護者と、そうでない保護者がいることが想定される。そこで、本研究では、特性シャイネスを保護者の相談行動の抑制要因として扱い、特性シャイネスが誰に対する相談を抑制するのか明らかにする。

特性シャイネスは社会的スキルと関連することが明らかになっている。特性シャイネスと社会的スキルの関連を検討した徳永・稲畑・原田・境（2013）は、特性シャイネスと社会的スキルの間には負の関連があることを報告している。また、特性シャイネスと援助要請の関連を検討した栗林（2019）では、特性シャイネスが高いほど援助要請を回避することが報告されている。

さらに、特性シャイネスと自己認知および対人認知の関連も明らかになっている。栗林・相川（1995）は、実験により、特性シャイネスの高い者は、自分が相手からポジティブに評価されていないと感じていることを明らかにした。また、特性シャイネスの高い者は、相手のことをネガティブに評価していた。特に、相手に対しては積極性や自信の程度などを反映した「力本性」の次元を低く評価する傾向にあった。

以上を総合すると、特性シャイネスが高い者は社会的スキルが低く、援助要請を回避する傾向にある。加えて、自分が相手からよく思われていないと感じやすく、相手に対してもエネルギーであるという評価をしない傾向にある。よって、特性シャイネスが高い者は、他者に相談するスキルが低く、相談相手を信頼しにくいことが予想される。保護者にこのような特性が見られた場合には、適切な相談が行われず、子への支援が不十分になることも起こりうるであろう。

本研究では、保護者が専門家に対し、子についての相談を行うことについて扱う。そのため、「援助を求めることへの心配」を測定する。「援助を求めることへの心配」は、「子どもに関する悩みに関して保護者が援助を求めることに対してもつ心配」（山崎・飯田，2016）と定義されており、援助要請等と比較

して、より保護者の相談の実情に即した概念であると考えられる。尺度は2つの下位尺度で構成されている。第一は「相談行為に対する心配」（以下、相談行為心配と呼ぶ）であり、相談することで子や家庭に悪影響があるのではないかという内容の心配である。第二は「相談相手に対する心配」（以下、相談相手心配と呼ぶ）であり、相談相手が信頼できるのか、あるいは相談内容が十分解決されるのかということについての心配である。いずれの下位尺度も、「学校の先生」、「SC」、「外部の相談機関」の3つの専門家を想定して回答させる構造になっている。

本研究の仮説は次の3点である。第一に、特性シャイネスが高い保護者は、学校の先生のような相談以前から知っている相手よりも、相談によって新たに知り合うことになるSCや外部の相談機関の人に対してより心配を感じると予想される。よって、学校の先生を想定した場合には特性シャイネスと援助を受けることへの心配の間の相関係数が高く、SCや外部の相談機関を想定した場合には特性シャイネスと援助を受けることへの心配の間の相関係数は学校の先生を想定した場合よりは低いだろう。

第二に、特性シャイネスが高い保護者は、相談相手の問題解決能力などを低く評価する可能性がある。そのため、特性シャイネスの高い保護者は、相談相手への心配を強く持つと予想される。よって、特性シャイネスとの相関係数は、相談行為心配と比べ、相談相手心配のほうが強いだろう。

第三に、子の性別によって特性シャイネスと相談への心配の関連の様相に差が見られることが予想される。特性シャイネスと援助要請の関連を検討した栗林（2019）では、男性では有意な関連が見られたものの、女性では有意な関連が見られなかった。本研究では、相談内容が子に関するであることを鑑み、子の性別によって関連のあり方が異なると予想する。なぜなら、子の性別によって、保護者がとるべき行動が異なると認識されていることが想定可能であるためである。栗林（2019）では、援助要請と特性シャイネスの間に見られる関連が性別によって異なることが報告されている。特に、男性では特性シャイネスが高いほど、援助要請を避け、サポートが得られそうな場合にもサポートを受け入れないことが示されている。一方で、女性では、特性シャイネスが援助要請やサポートの受け入れと関連を示さなかった。栗林（2019）では、援助

を要請する人と援助を受ける人が同一人物であるが、本研究では異なる人物である。つまり、保護者が子についての相談をした場合、保護者だけではなく、子も援助を受ける可能性が高い。特に、毎日学校に通っているという性質上、子への援助は日常的に行われる可能性がある。そのため、相談者である保護者の性別ではなく、子の性別によって関連に性差が見られることが推測される。具体的には、栗林（2019）で見られた性差と同様の性差が、回答者本人の性別ではなく、回答者の子の性別について見られると予想する。つまり、子が男子の場合には有意な関連が見られるが、子が女子の場合には関連が有意ではない、あるいは有意であっても値が小さいだろう。

加えて、本研究では、山崎・飯田（2016）について追試的検討を行う。具体的には、子の性別や学年に基づいた分析を山崎・飯田（2016）に準じて行い、同様の結果となるか検討する。同様に、3種類の相談先についての援助を求めることへの心配の差についても検討する。

## 方 法

### 調査内容

(1)特性シャイネス：特性シャイネス尺度（相川，1991）を使用した。16項目で、「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」までの5件法であった。(2)援助を求めることへの心配：保護者の援助を求めることへの心配尺度（山崎・飯田，2016：以下、援助を求めることへの心配尺度と呼ぶ）を使用した。Raviv, Raviv, Propper, & Fink（2003）をもとに作成された尺度である。原尺度はSCと民間のカウンセラーの2つの相談先を想定して回答させる形式であったが、日本語版は日本の教育相談の現状に合わせ、学校の先生・SC・外部の相談機関の3つの相談先を想定して回答させる形式に改められている。また、項目数については、原尺度は2カテゴリーを合計16項目で測定する尺度であるのに対し、日本語版は項目の調整を行い、2下位尺度を合計19項目で測定する尺度となっている。本研究では、山崎・飯田（2016）の尺度から、因子負荷量の高い項目を各下位尺度4項目選び使用した。「相談行為に対する心配」の測定には項目番号6, 8, 11, 17, 「相談相手に対する心配」の測定には項目番号18, 19, 17, 3を使用した。「全く心配ではない」から「非常に心配である」の5件法で回答を求

めた。(3)人口統計学的変数：回答者の年代と性別、子の学年と性別（子が複数いる場合は下の子について回答するように教示）、居住地域について尋ねた。

### 調査時期

2020年2月に実施した。

### 調査対象者

アイブリッジ株式会社の運営するインターネットリサーチサービス「Freeasy」を利用して調査を実施した。Freeasy登録者から、子のいる人5000人を抽出し、スクリーニング項目として「あなたには、現在、中学生のお子さんがいますか？」と尋ねた。スクリーニング項目への回答者のうち、「中学生の子どもがいる」と回答した1110人に対し、本調査の案内を送付し、回答者が400人に達した時点で回答の募集を終了した。

### 倫理的配慮

著者の所属機関に設置された研究活動推進委員会において研究計画書の審査を受け、倫理的問題がないことが確認された。

## 結 果

### 調査対象者の属性

400人から調査への回答が得られた。このうち、特定の下位尺度中全ての項目に同じ選択肢の回答をしていることが確認された77人のデータを回答態度に問題があると見なして分析に用いないこととし、最終的に323人のデータを用いて分析を行った。回答者の年齢は、30代が68人（男性23人、女性45人）、40代が184人（男性75人、女性109人）、50代が71人（男性53人、女性18人）であった。

子の学年と性別は、中学1年生男子が63人、中学2年生男子が55人、中学3年生男子が56人、中学1年生女子が67人、中学2年生女子が36人、中学3年生女子が46人であった。

回答者の住んでいる都道府県の内訳は、北海道・東北地方が41人、関東地方が117人、中部地方が57人、近畿地方が62人、中国地方が14人、四国地方が3人、九州・沖縄地方が29人であった。

### 基本統計量



基本統計量を Table 1 に示した。各尺度について、得点が高くなるほどその特徴に強く当てはまるように得点化した。各尺度について、全項目の素点を加算し項目数で除した値を分析に用いた。α 係数は全ての尺度において十分高かった。

Table 1 各尺度の基本統計量およびα係数 (N=323)

尺度	M	SD	α 係数
特性シャイネス	3.109	0.644	.901
援助を求めることへの心配尺度			
学校の先生・相談行為心配	2.770	0.826	.854
学校の先生・相談相手心配	3.413	0.767	.818
SC・相談行為心配	2.824	0.829	.875
SC・相談相手心配	3.338	0.791	.836
外部機関・相談行為心配	2.901	0.860	.880
外部機関・相談相手心配	3.394	0.855	.877

### 保護者の性差の検討

回答者の性別によって各尺度の得点が異なるかを確かめるため、対応のない *t* 検定を行った。その結果、回答者の性別によって得点に有意な差が見られる尺度はなかった（男性回答者 152 人、女性回答者 171 人）。同様に、子の性別に基づいて対応のない *t* 検定を行ったところ、外部機関の相談行為心配において有意な差が見られた（子が男子の回答者 174 人、平均値 2.989, *SD*=0.830 : 子が女子の回答者 149 人、平均値 2.799, *SD*=0.885 :  $t(321)=1.988, p<.05$ ）。その他には有意な差が見られた尺度はなかった。

### 各尺度間の相関分析

まず、特性シャイネス尺度と援助を求めることへの心配尺度の相関係数を求めた (Table 2)。全体では、特性シャイネスは全ての相談先に対し、相談行為心配、相談相手心配の両下位尺度と有意な正の相関を示した。しかし、子の性別ごとに相関係数を算出したところ (Table 3)、子が男子の場合は SC の相談行為心配以外の全ての組み合わせで有意な正の相関が見られたが、子が女子の場合は一部で有意な相関が見られるに留まった。子が女子の場合、全体として特性シャイネスと相談行為心配の間の関連が有意でないか、有意であっても弱

い正の相関に留まり、保護者の特性シャイネスが高くなるほど相談行為心配が高まる一貫した傾向は見られなかった。

Table 2 各尺度間の相関係数 (N=323)

	1	2	3	4	5	6
1 特性シャイネス	-					
援助を求めることへの心配尺度						
2 学校の先生・相談行為心配	.284**	-				
3 学校の先生・相談相手心配	.229**	.381**	-			
4 SC・相談行為心配	.118*	.694**	.379**	-		
5 SC・相談相手心配	.169**	.345**	.705**	.496**	-	
6 外部機関・相談行為心配	.161**	.599**	.359**	.703**	.417**	-
7 外部機関・相談相手心配	.235**	.285**	.649**	.383**	.701**	.574**

注) \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

Table 3 子の性別ごとの特性シャイネスと援助を求めることへの心配の相関係数および偏相関係数

N(男性:女性)		学校の先生		SC		外部機関	
		相談行為 心配	相談相手 心配	相談行為 心配	相談相手 心配	相談行為 心配	相談相手 心配
全体 323(172:151)	相関	.284**	.229**	.118*	.169**	.161**	.235**
	偏相関	.219**	.136*	.039	.129*	.033	.176**
子が男子 174 (82:92)	相関	.348**	.215**	.134	.161*	.200**	.255**
	偏相関	.288**	.069	.067	.112	.059	.171*
子が女子 149 (69:80)	相関	.197*	.249**	.092	.177*	.107	.211**
	偏相関	.132	.203*	.001	.151	-.008	.182*

注1) 各相談相手について、相談行為心配の場合は相談相手心配を、相談相手心配の場合は相談行為心配を統制して偏相関係数を算出した。

注2) \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

### 特性シャイネスと援助を求めることへの心配の間の偏相関分析

特性シャイネスと2つの心配の関連を検討するため、偏相関係数を算出した。いずれの相談先に対しても、相談行為心配と相談相手心配には中程度から高い相関が見られるため、相談相手心配を統制した特性シャイネスと相談行為心配の偏相関係数、相談行為心配を統制した特性シャイネスと相談相手心配の偏相関係数を算出した (Table 3)。

第一の仮説の検討のため、専門家の種類ごとに偏相関係数の値を確認したところ、特性シャイネスと相談相手心配の偏相関係数が大きいのは、外部機関

(偏相関係数=.176,  $p<.01$ ), 学校の先生 (偏相関係数=.136,  $p<.05$ ), SC (偏相関係数=.129,  $p<.05$ ) の順であった。第一の仮説では、保護者が相談以前から知っている相手の場合、関連が弱くなると考えた。そのため、学校の先生を想定した場合の偏相関係数は最も小さくなると考えられるが、そのような結果は得られなかった。しかし、最も値が高い専門家は外部機関であり、相談がなければ会うことのない相手に対して相談相手心配が高まりやすいことが示され、第一の仮説は部分的に支持された。一方で、特性シャイネスと相談行為心配の偏相関係数は、学校の先生を想定した場合のみ有意であった (偏相関係数=.219,  $p<.01$ )。相談行為心配については第一の仮説は支持されなかった。

第二の仮説の検討のため、特性シャイネスと相談行為心配および相談相手心配の偏相関係数を相手先ごとに保護者全体のデータを用いて比較した。その結果、SCと外部機関については、特性シャイネスと相談行為心配の間の偏相関係数が有意ではなく、特性シャイネスと相談相手心配の間の偏相関係数のみが有意であった (SC: 偏相関係数=.129,  $p<.05$ ; 外部機関: 偏相関係数=.176,  $p<.01$ )。一方で、学校の先生についてはいずれの偏相関係数も有意である上、相談行為心配の偏相関係数の方が値が大きかった (相談行為心配の偏相関係数=.219,  $p<.01$ ; 相談相手心配の偏相関係数=.136,  $p<.05$ )。よって、第二の仮説については部分的に支持された。

第三の仮説を検討するため、子の性別ごとの偏相関係数を算出した (Table 3)。SCと外部機関を想定した場合については、子の性別によらず同様の傾向が得られた。まず、SCについては子が男女いずれの場合にも特性シャイネスと相談行為心配および相談相手心配の間に有意な関連が見られなかった。また、外部機関については、子が男女いずれの場合にも特性シャイネスと相談相手心配の間に弱いながらも有意な偏相関が見られた (子が男子: 偏相関係数=.171,  $p<.05$ ; 子が女子: 偏相関係数=.182,  $p<.05$ )。一方、学校の先生については性差が見られた。子が男子の場合には特性シャイネスと相談行為心配の偏相関係数が有意であった (偏相関係数=.288,  $p<.01$ ) が、子が女子の場合には特性シャイネスと相談相手心配が有意であった (偏相関係数=.203,  $p<.05$ )。このことから、子の性別にかかわらず、SCと外部機関では保護者の特性シャイネスが高いほど相談相手への心配が高いことが示された。一方で、子の性別によっ

て異なる結果が得られたものの、子が男子の場合のみでなく子が女子の場合にも有意な関連が得られた。よって、子が男子の場合にのみ保護者の特性シャイネスと援助を求めることへの心配が関連するという第三の仮説については支持されなかったといえる。

### 援助を求めることへの心配についての追試的検討

最後に、山崎・飯田（2016）について追試的検討を行った。まず、子の性別と学年を独立変数とした2要因の分散分析を行った（Table 4）。その結果、学校の先生への相談行為心配で子の学年と子の性別の主効果が見られた（子の学年： $F(2, 317)=5.367, p<.01$ ；子の性別： $F(1, 317)=5.187, p<.05$ ）。Bonferroni法による多重比較の結果、子の学年では2年生より1年生の方が、子の性別では女子より男子の方が得点が高かった。SCについては、相談行為心配において、子の学年の主効果が見られた（ $F(2, 317)=6.203, p<.01$ ）。Bonferroni法による多重比較の結果、子の学年が2年より1年の方が得点が高かった。外部の相談機関については、相談行為心配において、子の性別の主効果が見られた（ $F(1, 317)=5.341, p<.05$ ）。Bonferroni法による多重比較の結果、子が女子より

Table 4 子の学年および子の性別を独立変数、援助を求めることへの心配を従属変数とした2要因分散分析の結果

		1年生		2年生		3年生		F値			多重比較
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	子の学年	子の性別	交互作用	
	N	63	67	55	36	56	46				
学校の先生											
相談行為	M	2.905	2.881	2.673	2.382	2.946	2.630	5.367**	5.187*	1.148	1年>2年, 男子>女子
心配	SD	0.752	0.855	0.852	0.648	0.919	0.750				
相談相手	M	3.500	3.507	3.327	3.458	3.375	3.272	1.625	0.018	0.545	
心配	SD	0.769	0.828	0.733	0.755	0.798	0.681				
SC											
相談行為	M	2.964	3.026	2.777	2.444	2.857	2.647	6.203**	2.997	1.695	1年>2年
心配	SD	0.794	0.879	0.745	0.715	0.862	0.841				
相談相手	M	3.357	3.496	3.295	3.299	3.406	3.082	1.660	0.462	2.526	
心配	SD	0.824	0.865	0.684	0.760	0.724	0.822				
外部機関											
相談行為	M	3.008	2.970	2.886	2.667	3.067	2.652	1.711	5.341*	1.391	男子>女子
心配	SD	0.802	0.921	0.870	0.800	0.825	0.870				
相談相手	M	3.480	3.511	3.305	3.382	3.491	3.103	1.738	0.928	2.301	
心配	SD	0.779	0.957	0.860	0.848	0.809	0.814				

注) \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

男子の方が得点が高かった。

学校の先生については、山崎・飯田（2016）で見られた相談行為心配の学年差と類似した結果が得られた。一方で、学校の先生の相談行為心配の学年差、SCの相談行為心配の学年差、外部の相談機関の相談行為心配の性差は山崎・飯田（2016）では見られなかった差である。また、山崎・飯田（2016）で確認された学校の先生の相談相手心配の学年差、外部の相談機関の相談相手心配の学年差については、本研究では確認されなかった。

次に、学校の先生・SC・外部機関の3種類の相談先について、相談行為心配および相談相手心配を従属変数とした1要因3水準の分散分析を行った。その結果、相談行為心配については、有意な差が見られた ( $F(2, 644)=5.929, p<.01$ ; 平均値とSDはTable 1を参照) が、相談相手心配については有意な差は見られなかった。相談行為心配について、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、外部機関の得点が学校の先生の得点と比較して高く、山崎・飯田（2016）と類似の傾向が見られた。

## 考 察

本研究の目的は、中学生の子を持つ保護者において、特性シャイネスが誰に対する相談を抑制するのか明らかにすることであった。323人のデータを用いて分析を行い、3点の仮説について検討を行った他、山崎・飯田（2016）について追試的検討を行った。

第一の仮説として、特性シャイネスが高い保護者は、担任教師のような相談以前から知っている相手よりも、相談によって新たに知り合うことになるSCや外部の相談機関の人に対してより心配を感じるかどうか検討した。特性シャイネスと各専門家への相談相手心配の関連の強さは、関連の強い順に、外部の専門家、学校の先生、SCであった。第一の仮説に合致した結果であれば、相談以前から知っている学校の先生で関連の強さが最も小さくなると想定されるが、異なる結果となった。これは、生徒にとっては毎日会う学校の先生でも、保護者にとってはそれほど熟知性が高いわけではないことを反映している可能性がある。保護者は学校の先生について、配付物で人となりを知ったり、面談などで会う程度であり、子である生徒が学校の先生について知っているほどは

知っている情報が多くない。そのため、相談への抵抗感を覚えにくいということにはならないものと考えられる。一方で、第一の仮説に基づいて考えると、外部の専門家について、特性シャイネスと相談相手への心配の関連が最も強かったことは仮説に合致した結果である。よって、第一の仮説は部分的に支持されたと考えられる。

第二の仮説として、特性シャイネスが高い保護者が相談相手への心配を強く持つかどうか検討した。学校の先生については、特性シャイネスと相談相手への心配との関連が、相談行為への心配との関連よりも弱かったため、第二の仮説とは異なる結果となった。SCと外部機関については、特性シャイネスと相談相手への心配の間に関連が見られた一方、特性シャイネスと相談行為への心配の間には関連が見られず、第二の仮説に合致した結果が得られた。この結果から、第二の仮説についても部分的に支持されたと考えられる。

第三の仮説として、子の性別によって特性シャイネスと援助を求めることへの心配の関連の様相に差が見られるかどうか検討した。子の性別ごとに分析した結果、子の性別にかかわらず、外部機関に対しては、保護者の特性シャイネスが高いほど相談相手への心配が高かった。また、SCに対しては子の性別にかかわらず、いずれの心配も特性シャイネスと関連が見られなかった。一方で、学校の先生に対しては子の性別によって異なる結果が得られた。子が男子の場合、保護者の特性シャイネスと相談行為への心配が正の関連を示したのに対し、子が女子の場合は保護者の特性シャイネスと相談相手への心配が正の関連を示した。第三の仮説では、子が男子の場合に保護者の特性シャイネスが援助を求めることへの心配と関連を示すと仮定したが、本研究の結果では性差が見られたものの、子が男子の場合に一貫した関連が見られるという結果は得られず、第三の仮説は支持されなかった。

子の性別ごとの分析では、相談先によって異なる結果が得られた。学校の先生のみ、子の性別によって保護者の特性シャイネスと援助を求めることへの心配の関連の様相が異なるという結果であった。特性シャイネスの高い保護者は、子が男子の場合には、学校の先生に相談して良いものかと心配しやすく、子が女子の場合には、学校の先生が頼りになるのか心配しやすいという結果であった。SCや外部機関に対しては性差が見られなかったことと併せて考えると、

学校の先生の特異性がうかがえる。つまり、子にとっては評価者である一方で、保護者にとっては相談相手にもなり得るため、相談する際に保護者が子の性別によって異なる葛藤を抱えやすい可能性がある。

子が男子の場合に学校の先生に相談して良いものかと心配しやすいのは、相談したことが成績評価や進路指導に影響する可能性を考慮するためである可能性がある。山崎・飯田（2017）では、子が男子の場合に、学習面、心理・社会面、進路面での保護者の援助ニーズが高いことが報告されている。これについて、山崎・飯田（2017）では、子が男子の場合、保護者が進路への期待を強く持つことを理由の一つとして挙げている。本研究の結果も、同様の傾向を反映したものと考えることが可能であるだろう。

また、子が女子の場合に、学校の先生が頼りになるのか心配しやすいのは、保護者がより具体的な解決を求める状態にあるためと考えることができる。永井・新井（2005）では、男子よりも女子の方が保護者へ悩みを相談する傾向にあった。子が女子の場合、保護者がすでに子から問題状況について聞くことができていると考えられる。そのため、特性シャイネスが高い保護者は、学校の先生が解決能力を有するか心配になると解釈することができるだろう。

以上、3点の仮説について検討した結果から、中学生の子を持つ保護者の特性シャイネスの高さが、学校の先生・SC・外部の専門家のとらえ方をどのように規定するのかについて、次のことが示唆された。まず、学校の先生については、子が男子の場合、特性シャイネスの高い保護者は相談をすること自体へ抵抗を感じやすいことが明らかになった。また、子が女子の場合、特性シャイネスの高い保護者は学校の先生が相談相手として十分かという心配を感じやすいことが明らかになった。そのため、男子の保護者に対しては、守秘義務が守られることや、相談が進路等に影響しないことを周知することが重要と考えられる。一方、女子の保護者に対しては、どのような問題への相談に対応しているのかを周知することが重要と考えられる。保護者からの相談に教師が適切に対応することができた場合、子に対し、学校と家庭で共通した対応をとることが可能となる（久保田、2020）ため、保護者が相談をしやすくなるような周知が必要である。

次に、SCについては、子の性別に関係なく、保護者の特性シャイネスが高

くても、相談へ心配を感じるには限らないことが明らかとなった。このことから、SCについては高い特性シャイネスを示す保護者について、周知に際して特別な配慮は必要ないことが示唆された。藤後・大橋・岩崎（2016）は、保護者にSCの利用を促すためには、配付物等を通じてSCの人となり伝えていく等の方法で、親和的イメージを向上させること等が重要であると指摘している。SCについては、保護者の特性シャイネスに配慮する必要がないため、藤後・大橋・岩崎（2016）で提言された保護者全体に対する周知方法が有効であると考えられる。

最後に、外部の専門機関については、子の性別にかかわらず、弱いながらも特性シャイネスと相談相手への心配との間に関連が見られ、特性シャイネスの高い保護者が外部の専門機関に対し、相談相手として十分かという心配を感じやすいことが示唆された。そのため、保護者に対し、どのような問題への相談に対応しているのか、どのような専門家が在籍しているのかなどの情報を周知していくことが相談への抵抗感を低減するものと考えられる。外部の専門機関は保護者の中でも援助ニーズの高い一部が利用するという特徴がある。教師やSCから外部の専門機関の利用を提案する際に、上記の内容を含めて伝えていくことが、特性シャイネスの高い保護者の利用につながると考えられる。

加えて、本研究では、子の性別や学年に基づいた分析を山崎・飯田（2016）に準じて行い、同様の結果となるか追試的に検討した。一部について、山崎・飯田（2016）と類似の結果が得られたものの、全体としては山崎・飯田（2016）で確認された差が本研究では確認されなかった。本研究では調査をwebで実施するにあたり、援助を求めることへの心配尺度について、一部の項目のみを使用した。そのため、山崎・飯田（2016）と異なる結果が得られた可能性がある。一方で、学校の先生については、山崎・飯田（2016）で見られた相談行為心配の学年差と類似した結果が得られた。保護者が学校の先生に対して感じる相談してもよいものかという心配は、1年生の子を持つ親の方が、2年生の子を持つ親より高いという結果は、中学入学という移行期の保護者支援について示唆に富む重要な結果である。

3種類の相談先についての援助を求めることへの心配については、相談行為への心配でのみ差が見られ、外部機関への心配が学校の先生への心配と比較し



て強いことが示された。山崎・飯田（2016）では、相談行為への心配が強い順に、外部機関、SC、学校の先生となっており、本研究でも類似の結果が得られた。外部機関に相談することの心理的障壁の高さが本研究でも再現されたと考えられる。一方で、相談相手への心配では相談先による差は見られず、山崎・飯田（2016）とは異なる結果となった。こちらについても、援助を求めることへの心配尺度について、一部の項目のみを使用したことの影響を考慮する必要がある。

本研究では、中学生の子を持つ保護者の特性シャイネスに着目し、専門家への相談のしにくさについて検討した。不登校児童生徒への支援においては、教師と保護者との連携や、教師から保護者に対する支援が必要であることが強調されている（文部科学省、2016）。本研究では、特性シャイネスが高い保護者が各専門家に対して抱く相談への心配を明らかにし、各専門家について保護者に事前にどのような情報を周知しておく必要があるかについて、調査の結果に基づいて提言した。周知方法の工夫により、相談したいことを抱えても相談につながりづらい保護者に対し、相談しやすい環境を整えることが可能となる。以上から、本研究では実践上意義のある結果が得られたといえる。

しかしながら、本研究では専門家への相談に焦点を当てたため、配偶者や自らの親、知り合いの保護者など、私的で身近な相手への相談は扱わなかった。今後は、特性シャイネスの高い保護者が私的で身近な関係の相手に対し子についての相談を行っているのかどうかについても明らかにし、特性シャイネスの高い保護者の相談行動を包括的に扱っていく必要がある。

## 引用文献

相川 充(1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.

石隈 利紀(1999). 第9章 カウンセリング：児童生徒への直接的援助として 石隈 利紀（著）学校心理学：教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス（pp.233-258）誠信書房

北島 正人(2012). 保護者相談におけるスクールカウンセラーのマネジメント機能 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 34, 169-177.

- 久保田 みどり (2020). 保護者からの連絡をチャンスに変える 月刊学校教育相談, 2020年11月号, 30-32.
- 栗林 克匡 (2019). シヤイネスが援助要請とサポート受容に及ぼす影響 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 56, 1-6.
- 栗林 克匡・相川 充 (1995). シヤイネスが対人認知に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 35, 49-56.
- 増田 成美・吉岡 久美子・石井 弓 (2016). 中学生の援助要請行動と相談抑制に関する研究: 文献レビューを通して 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要, 15, 87-102.
- 水子 学・寺寄 正治・金光 義弘 (2002). 感情特性が対人相互作用量に及ぼす影響: 結果予期と効力予期の媒介的役割 性格心理学研究, 10, 98-107.
- 文部科学省 (2016). 不登校児童生徒への支援の在り方について (通知) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1375981.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1375981.htm) (2022年6月7日)
- 永井 智・新井 邦二郎 (2005). 中学生における悩みの相談に関する調査 筑波大学発達臨床心理学研究, 17, 29-37.
- Raviv, A., Raviv, A., Propper, A., & Fink, A. S. (2003). Mothers' attitudes toward seeking help for their children from school and private psychologist. *Professional Psychology: Research and Practice*, 34, 95-101.
- 桜井 茂男・桜井 登世子 (1991). 大学生用シヤイネス (shyness) 尺度の日本語版の作成と妥当性の検討 奈良教育大学紀要 (人文・社会科学), 40, 235-243.
- 高柳 真人・藤生 英行 (2014). シヤイな教師の対人行動と職務遂行の関連について びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 11, 41-53.
- 高柳 真人・田上 不二夫・藤生 英行 (2005). シヤイな教師がシヤイネスを喚起される学校場面に関する研究 カウンセリング研究, 35, 109-118.
- 丹野 義彦・坂本 真士 (2001). 対人不安 自分のこころからよむ臨床心理学入門. 東京大学出版会.
- 藤後 悦子・大橋 恵・岩崎 智史 (2016). 子育て中の母親のスクールカウンセラーへの援助要請 東京未来大学研究紀要, 9, 137-147.
- 徳永 沙智・稲畑 陽子・原田 素美礼・境 泉洋 (2013). シヤイネスと被受容感・被拒絶感が社会的スキルに及ぼす影響 徳島大学人間科学研究, 21, 23-34.

山崎 沙織・飯田 順子(2016). 中学生の保護者が教師・スクールカウンセラー・外部の専門機関に援助を求めることへの心配尺度の作成とその特徴 教育相談研究, 53, 13-24.

山崎 沙織・飯田 順子(2017). 中学生の保護者の援助ニーズが相談意図・相談経験に及ぼす影響：保護者の心配を媒介として 筑波大学心理学研究, 54, 117-126.

## 謝 辞

尺度の使用を許可してくださいました相川充先生と筑波大学の飯田順子先生に感謝申し上げます。また、執筆にあたりご助言をいただきました筑波大学の佐藤有耕先生に感謝申し上げます。